

近頃放送淨曲覺書

本誌同人 中野六々魚

一、女義寺子屋傳合

當夜の放送では、團司が他の若手に華を持たせて自分が一番輝くようにして不得手の源藏に廻つてゐる心構への床しさを第一に氣持よく感じる。仕込も足らず演りどころも少いの熱演は感心、しかし「いぶかしさ」の語尾の喰ひ切りがまづかつた。あの呼吸はむづかしいものだが、何だかもつと工夫が出来さうなもの。

清絲の戸浪、雛昇の千代はかくべつのことでもなかつたが綱龍の松玉がちとき劣りがした。荷が勝ちすぎてゐるやうな進々しさを覺えたが泣き笑ひは割りに旨かつたか？力にあまつた大業を懸命にこなしてゐる悲壯さをめでてか？聴客席から拍手が起き、更に間をおいて「出来た」と力づよい聲援がマイクに入るなど、スピーカーを通じてきくだけ趣は深かつた。

いろは送りとは名手小住の三絃と相俟つて氣持よき出来、情味と節調との渾熟せる近頃のききものだった。「明日の夜誰か添乳せむらむ憂目見る親心」の節尻が節廻しになづみすぎて情味を忘れたらしかつた以外は、女義らしい節のあて込みもなく、つましく美しく哀れに語つて恍惚たる忘我の境へつれ込まれてしまつた。掛合だから各々替つて演じてゐるのだらうに、際立つた各自の特色もき々わけ得

ず、一人で演じてゐるのだらうと思はれるやうな錯覺を起したのは私の耳の鈍なせいであらうか？

二、三蝶の御殿後半

三蝶の藝を私は可成り買つてゐる。がめつたと放送には出ないと見へて昭和九年の八月に「女義さはりの夕」で酒屋のお園の口説きを小住の三味線できいて、その時顔を並べた東西の若手師々連の中で、この人だけに讃辭を呈して以來の久闊さだ。

當夜もそんな次第でたのしみしてゐたところへ森下氏からびひこれをきけとの嚴命あり張り切つてゐたのに、後半榮御前の出からと知つて大に興をそがれた、何故前半をきかしてくれなかつたか！

出来榮はまあ一通り、何處といつて耳だつた、いところもない代り、ア、そこくと膝をうつほどの妙所もなかつた。強ひて注文をつけるとなれば

八沙が總じて小さく太々しい憎みが些か不足だつたこと「くるしむ聲の肝先へ」のくるしむのつき込み方、その描寫が不充分でんに力こもらず、あとのこゑを持ちすぎて振るのは不感服、理窟からいつてもくるしむ姿のむごたらしさをこそ強調すべきなのにお留守にしてしまつて、こゑにのみ意味合を持たせやうとする演り方はどうだらう。

口説はあまり唄はず語る腹構へ得心。その代り「千年萬年待つたと何の便りが」でこの人一流の魅惑ある小味な節廻しをこゝぞとばかり發揮して大に唄ひまくつた。この風情は捨てがたい。(完)